8 『新装版 新・ゴロゴ漢文』付属演習プリント【解答・解説編】

解答 ③

前講で予告したとおり、対句に着目して解く問題である。もう一度基本を確認しておこう。**対句とは、意味的・構造的に対応する2つの句を並べることである。意味的には、同義語あるいは反対語が並べられる。一方、構造的には、述語や客語の位置が同じで、返り点も同じように振られる。**

本問では、傍線部の「難罔以非其道」が、前の「可欺以其方」と対句の関係にある。

可　欺　以其方
⇔　⇔　⇔
難　罔　以非其道

「可」と「難」、「欺」と「罔」、「以其方」と「以非其道」がそれぞれ対応している。まず、「罔」の送り仮名であるが、対応する「欺」が「欺クニ」と訓んでいるのだから、「罔」も「罔フルニ」と訓むと推論できる。「A（動詞）以B（名詞）」の形は、「A（する）にBをもってす」と訓んで、「Bによって（Bを用いて）Aする」の意となる。本文では、「道理にかなった方法で欺く」「道理に外れた方法で欺く」ということである。

選択肢を見ると、「罔ふるに」と訓んでいない①・②・⑤は誤りで、③・④に絞られる。

次のポイントは、「難」の訓みと意味である。「難」は、動詞として「なんず」と訓む場合（非難する）と、返読文字として「～（し）がたし」と訓む場合（～するのは難しい）がある。本問では、返読文字の「可」と対応していることから、後者であると判断できる。つまり、「欺くことができる」「欺くことは難しい」と、意味的にも対になっているのである。よって、③が正解であると判定できる。

返り点の付け方と書き下し文の組み合わせを問う問題が出された場合は、両者はセットになっていて、返り点のみが誤り、あるいは書き下し文のみが誤りということはないので、どちらかが正しいことを確認すれば十分である。本問でも、正解の③以外の返り点の付け方はすべて誤っている。

選択肢チェック

問　傍線部A「難 罔 以 非 其 道」の返り点の付け方と書き下し文の組合せとして最も適当なものを、次の ① ～ ⑤ のうちから一つ選べ。

A　難 罔 以 非 其 道

① 難レ 罔 以レ 非二 其 道一
　罔ひ難きは其の道に非ざるを以てなり

② 難レ 罔 以レ 非二 其 道一
　罔ふるを難ずるに其の道に非ざるを以てす

③ 難二 罔 以レ 非二 其 道一
　罔ふるに其の道に非ざるを以てし難し

④ 難二 罔 以レ 非二 其 道一
　罔ふるに其の道に非ざるを以てするを難ず

⑤ 難レ 罔 以 非二 其 道一
　罔ふるを難じて以て其の道を非とす

難一可三欺以二其一方一
罔一以一非二其一道一

対句

※返り点も対応する

「可し(べし)」と対になる訓み方だから「難し」

「欺くに」と対になる訓み方だから「罔ふるに」

書き下し文

客有り柴窯の片磁を携へ、数百金を索めて云ふ、「冑に嵌むれば、陣に臨んで以て火器を辟くべし。然れども確たるや否やを知るに由無し」と。余曰はく、「何ぞ縄もて此の物を懸け、銃を以て鉛丸を発して之を撃たざる。如し果たして火を辟くれば、必ず砕けず、価数百金なるも多しと為さず。如し砕くれば、則ち火を辟くるの説確たらず、理として価数百金を索むる能はざるなり」と。鬻ぐ者肯ぜずして曰はく、「公賞鑑に於て当行に非ず、殊に殺風景なり」と。急ぎ之を懐にして去る。後貴家に鬻ぎ、竟に百金を得たりと聞く。

夫れ君子は欺くに其の方を以てすべきも、罔ふるに其の道に非ざるを以てし難し。

現代語訳

ある来客が名品の柴窯の片磁を持参し、数百金の値で売りつけようとして言うには、「(これを) 冑にはめておけば、戦陣に臨んで銃弾を避けることができます。ですが、それが確かなことかを知る方法はございません」と。それで私は言った。「どうしてこの破片を縄につるし、銃弾で撃ってみないのですか。もし本当に銃弾を避けたならば、戦陣でも絶対に砕けることはないですから、数百金の値でも高くはありません。もし砕けたならば、あなたの言う銃弾を避けるという説は確かでないですから、道理として数百金も値を求めることはできません」と。売人は承服しないで言った。「あなた様は磁器の鑑賞については専門家ではございませんね。野暮ったい人ですこと」と。あたふたと破片を懐にしまい込んで去ってしまった。後に高貴な家に売りつけて、ついに百金を手に入れたとのことである。

そもそも君子たる者は、道理にかなった方法で欺くことはできるが、道理に外れた方法で欺くことは難しい。

重要語句

□ **否**　「A否」で「A（なる）やいなや」と訓む。疑問形で、「Aだろうか、そうでないだろうか」の意。

□ **由**　「よし」と訓む。方法・手段の意。

□ **如**　本文では仮定形で「もし」と訓む。続く動詞の「辟」「砕」に「辟クレバ」「砕クレバ」と送り仮名をしていることから、仮定形と分かる。

9 『新装版 新・ゴロゴ漢文』付属演習プリント【解答・解説編】

解答 ③

本問も、**対句的な表現（厳密には対句ではないが）に着目して解く問題**である。「什則囲之」「伍則攻之」、そして、傍線部を含む「不敵則逃之」の３つの句の関係を踏まえて考えよう。

	（敵の軍勢と比べて）		（取るべき方法）
什則囲之	**十倍であれば**	↓	**包囲する**
伍則攻之	**五倍であれば**	↓	**攻める**
不敵則逃之	**「不敵」であれば**	↓	**逃げる**

注にあるとおり、「什則」「伍則」は敵の軍勢と比べて自軍の勢力が「十倍であれば」「五倍であれば」ということであるから、「不敵」も敵の軍勢と比較して自軍は「不敵」だという意味であると推定できる。これを踏まえて選択肢を見ると、②「敵意」・④「宿敵」・⑤「敵対」は、この意味に対応しておらず、誤りと判断できる。

次に、**「A則B」の形で示された、A（条件）とB（帰結）の関係**から考える。傍線部では、「不敵」の場合は「逃之」というのであるから、③「相手に匹敵しなければ」が適当であると考えられる。①「相手が弱敵でなければ」では、自軍との比較という視点が欠如している。よって、③が正解と確定できる。

解釈しよう。「自分の軍勢が敵の十倍であれば敵を包囲して降伏させる、五倍であれば攻撃して破る。しかし、相手に匹敵しなければ退却する。それが兵法の常である」ということである。

実戦的には、対句と句法や再読文字などを組み合わせて解くことが多い。このあとの問題にも出てくるので、トレーニングを積んでほしい。

選択肢チェック

問　傍線部A「不レ敵」の意味として最も適当なものを、次の①～⑤のうちから一つ選べ。

A　不レ敵

① 相手が弱敵でなければ ×
② 相手に敵意を持たなければ ×
③ 相手に匹敵しなければ ○
④ 相手が宿敵でなければ ×
⑤ 相手が敵対しなければ ×

「什」「伍」と対になる意味ではない

対句的な関係

什 ↓ 囲之
伍 ↓ 攻之
不敵 ↓ 逃之

書き下し文

夫れ兵を用ふるの法は、所謂常有り、所謂変有り。什なれば則ち之を囲み、伍なれば則ち之を攻め、敵せざれば則ち之を逃るるは、兵の所謂常なり。寡を以て衆を覆すは、兵の所謂変なり。古の善く兵を用ふる者は、能く寡を以て衆を覆すと雖も、什囲伍攻の道は未だ嘗て忽せにせず。所謂小変を行ふも其の大常を失はざるなり。

現代語訳

そもそも兵法には、いわゆる常があり、いわゆる変がある。自分の軍勢が敵の十倍であれば敵を包囲して屈服させ、五倍であれば攻撃して破り、匹敵しない軍勢であれば退却するというのが、兵法におけるいわゆる常である。少数の兵力で多勢の敵を破るというのが、兵法におけるいわゆる変である。古の兵法に巧みな者は、少数の兵力で多勢の敵を破ることが可能だとしても、十倍で囲み五倍で攻めるという兵法の常道はゆるがせにはしなかった。これがいわゆる小変は行っても大常は失わないということである。

重要語句

□ **所謂**　「いはゆる」と訓む。「世に言うところの」の意。

□ **雖**　「いへども」と訓む。逆接確定条件（～だけれども）の場合と、逆接仮定条件（～だとしても）の場合があるが、本文では後者。